

503

支那事變と民族原理

維新  
社

特253

443

フレット第一輯  
高瓊々彦述



\*0006852000\*

0006852-000

特253-443

支那事變と民族原理

日高瓊々彦・述

維新社

昭和14

ABG

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月23日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。



維新 社 綱 領

我等は日本精神の發揚を通じて皇國維新、亞細亞維新、  
世界維新の實現を期す。

維新パンフット第一輯刊行に際して

今や舊世界體制は崩壊し新世界體制が建設されんとしつゝある。聖戰支那事變は新世界體制建設への亞細亞に於ける巨大なる努力である。

本論稿は我等の尊敬する日高瓊々彦先生が昨年七月先生の主宰される文教振興會より發行せられ、支那事變の世界的歴史的重大性及び新亞細亞並に新世界建設の基本第一原理が民族原理に據るべき旨を強調されたるものである。支那事變に對する根本的認識と正しき自覺が要請せられつゝあるの際、甚だ貴重なる論稿と確信し、更に先生に強請し維新パンフット第一輯として再刊、同愛の士に頒布する次第である。

希くば熟讀心讀されんことを。

昭和十四年二月二十六日

維新 社 田 中 近 藏

持 253  
443

支那事變と民族原理

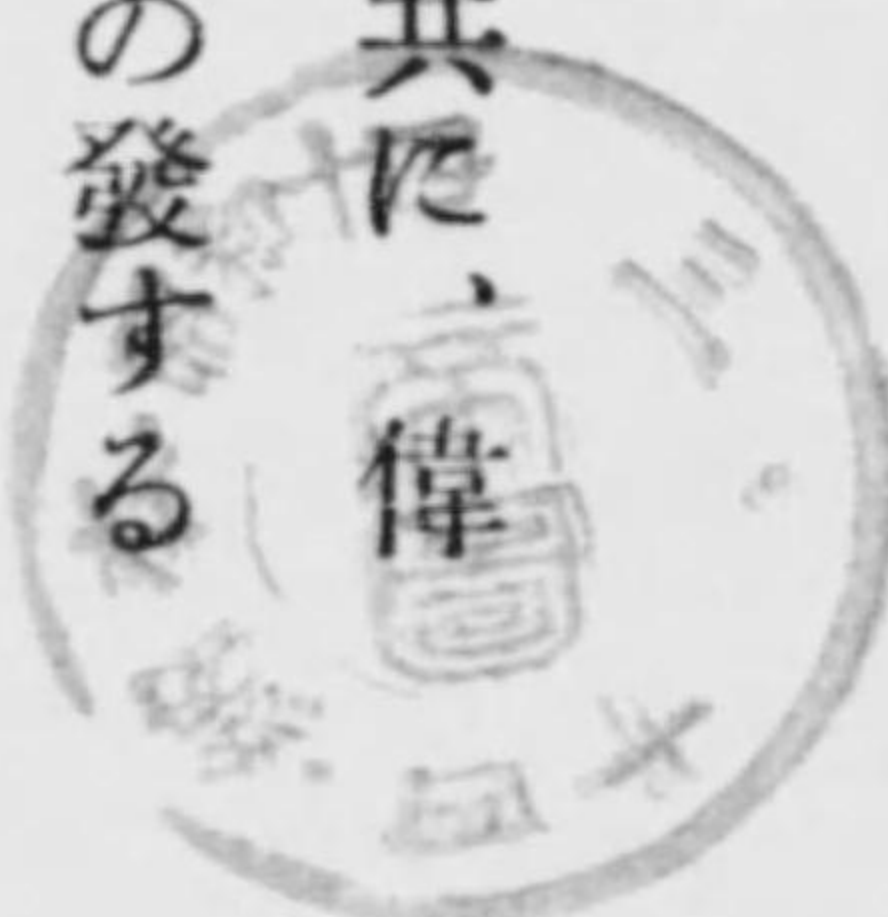
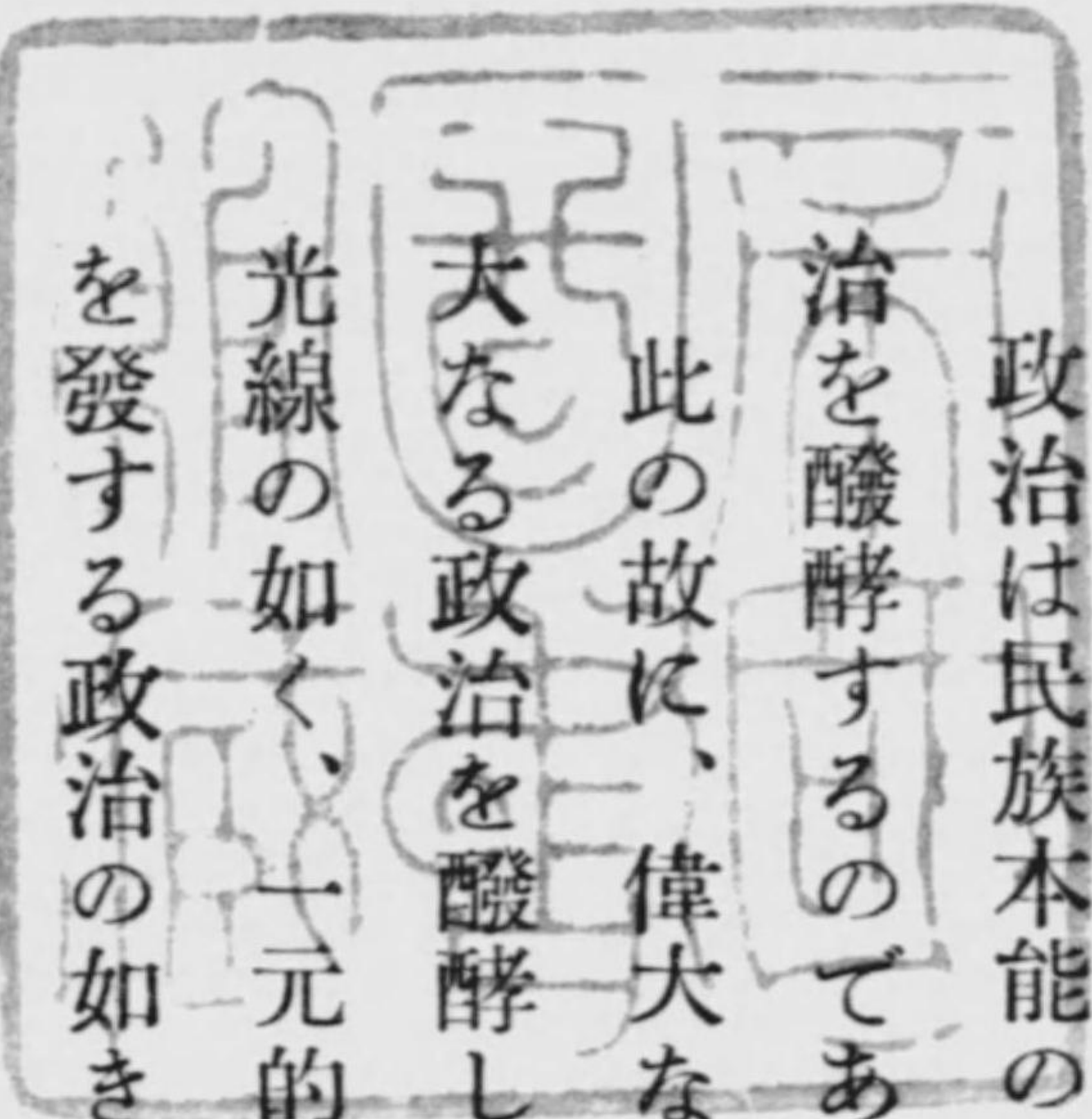
—

偉大なる民族は偉大なる思想を有する。偉大なる歴史事實の成長であるからである。

政治は民族本能の所産である。政治は決して民族を作るものではない。民族の本能が政治を醸酵するのである。

此の故に、偉大なる思想を有する偉大なる民族は、偉大なる歴史事實の成長と共に、偉大なる政治を醸酵して行く。茲に偉大なる政治とは、内治、外交、國防が、太陽の發する光線の如く、一元的に發光する政治の謂である。内治と外交と國防とが、各個別々に異光を發する政治の如きは、偉大なる思想を有する偉大なる民族の、偉大なる歴史事實の成長と共に醸酵しゆく偉大なる政治と云へぬ。

若しも内治に自覺ある緊張なく、外交に自信ある弾性がなければ、勢ひ國防武力が地下に國家の現實を背負ことゝなる。即ち裸體であつて、かくの如きは如何なる國家も願望せ





ざるところである。例へば内治は心であり、國防は肉體であり、外交は衣服である。而して、常時に於ても、非常時に於ても、心を有する肉體の着衣した容が、眞の國家の姿であらねばならぬ。此の故に、政治の第一義は文教にある。文教とは決して無人島に於ける道徳論の如きものではない。また政略的宣傳の謂でもない。歴史的民族事實に立脚せる内治外交國防に對する一元的發光の力強き現實自覺を云ふのである。

彼の蘇聯露西亞は共產主義による聯邦組織の國家であるが、其の經濟的産業的獨立の基調は専ら國防の充實にあつて、之れが光點となり國家經營の政治が行はれてゐる。それが露西亞の流儀である。

彼の英吉利は、自ら優秀種族であるとの自負に立脚し、其の優種保存の見地より、内治的にも外交的にも國防的にも、先進國たるあらゆる現實を利用して、便宜主義利益主義の政治を行つてゐる。それが英吉利の國風であり傳統である。

彼の獨逸はナチスによつて民族の統一を圖り、歐洲大戰に於ける頽勢を挽回して、今や現に北歐の國際的中心勢力たらんとしてゐる。それが即ち獨逸の民族性であり、其の民族

性が獨逸政治の基調となつて、内治も外交も國防も一元的に發光してゐる。

彼の伊太利はファツシヨによつて國家の統制を圖り、今や現に南歐の國際的中心勢力たらんとしてゐる。それが即ち伊太利流であり、内治的にも外交的にも國防的にも、ファツシヨが一元的に光點を爲してゐる。

併しながら若しも日本が、蘇聯の如くならんとして露西亞流儀の政治を學ぶならば、また英帝國の如きを欲して英吉利流の政治を行ふならば、また獨逸民族の如くならんとして我が國の政治をファツシヨ化するならば、日本國は遂に日本として存在せぬに至るであらう。何となればそれは日本國を發展せしめんと欲して、却つて日本を殺す作業に外ならぬからである。之れはまた蘇聯に於ても、英吉利に於ても、獨逸に於ても、伊太利に於ても、同様に然りである。即ち其の國の政治は其の國の歴史的民族本能の醗酵たるべきものである。

## 二

大凡政策とは、國家と國民とが其の特長と勢力とを保有し擴張し、他國に對して生存と



利益とを擁護し進渉する爲に用ゆる苦心努力の總稱である。之れが即ち自國及び他國、否  
 な世界に於ける列國の政策である。此の故に國際世界の現實は、甚だ複雑多事であり且つ  
 甚だ危険であつて、常に緊張せる内治と、強力なる國防と、彈性ある外交を必要とするの  
 である。然らずんば國家と國民とが其の特長と勢力とを保有し、他國に對して生存と利益  
 とを擁護することすら出来なくなるのである。

之れを我が國に適用して云へば、日本國の獨立を保ち其の特長と勢力とを保有し擴張し、  
 他國に對して極東に於ける日本國の特殊の地位と利益とを擁護し進渉し、以て東洋の平和  
 を維持することが、即ち我が日本の國是であつて、之れが爲めに用ゆる苦心努力が、即ち  
 我が國の政策であらねばならぬ。従つて我が國の政治が内治的にも、國防的にも、外交的  
 にも、此の國はこの政策に一致しあるべきは云ふまでもなきことである。

今回の所謂支那事變は、昭和十二年七月七日の蘆溝橋事件及び八月九日の上海事件に於  
 ける、支那軍隊の不法なる挑戰に對する我が軍隊の應戰によつて初まり、遂に今日の如き  
 展開を見るに至つた。而して其の消長は新聞紙上に見る如く、正に兩國の國防力の優劣に

よつて示めされつゝある。其の裏面に政府及び國民の熱中あることは云ふまでもない。戰  
 勝の爲めに必要なべきあらゆる方法が次ぎ〜に講ぜられてゐる。併しながら今回の所  
 謂支那事變なるものは、支那軍隊と日本軍隊との衝突より起つたところの、單に軍事上の  
 偶然的なる勃發事變のみの問題では決してないのである。

由來支那大陸は歐洲諸國に取つて、有望なる經濟的利用、若しくは領土的分割の境域で  
 ある。英吉利にしても、佛蘭西にしても、和蘭にしても、白耳義にしても、支那に彼等と  
 對抗するほどの、統制ある組織の完全することを欲しない。彼等はたゞ其の經濟的利用のた  
 めに、便宜と安全を得ればよい。目的とするところは彼等自國利益の増大にある。彼等の  
 對支全政策は、支那人及び支那政府を巧妙に利用して、自國利益の増大を計ることである。  
 かくて其の利益を獨占せんことを欲し、若し支那が承諾するに至らば、之れを自國の保護  
 領たらしめんとすら考へてゐる。それであるから支那分割論なども起るのである。彼等は  
 かゝる考へを以て支那大陸に臨んでゐるのである。

ところが日本にとつてこれほどの危険はない。故に日本は自國の存立のため、また東洋



平和維持のため、支那を救はんと欲して支那に對日親善を強要する。それだのに支那は之れを覺らず、事毎に日本の行動に反抗し、且つ對日のために歐洲諸國を誘引して只管抗日に専念する。然るに支那の日本に對するかくの如き態度は、これ實に歐洲諸國の希望するところである。即ち彼等は日本と支那との接近を希望しない。寧ろ支那と日本とを反目させることが彼等の利益である。日本の存在は正に彼等に取つて、其の目的遂行に對する惡むべき妨害者であると同時に、また最も恐るべき競争者なのである。従つて極東に於ける日本の行動には必然に彼等の壓迫が加はつて來るのである。

けれども日本は極東に於ける日本の行動を以て、東洋の平和を害するものとは決して思つてゐない。日本はそれを極東正義の實行と信じてゐる。而してそれが日本の國是なのである。即ち日本は自國の存立のために支那の完全なる獨立統制と、東洋平和維持のために對支の密接なる國交關係を必要とする。之れはまた極東人の極東保全の見地よりして、支那に取つても當然希望すべき正義であらねばならない。即ち支那は自國の存立のために日本の完全なる獨立と、東洋平和維持のために對日國交の密接を希望すべきである。而してそ

れが極東人の極東保全に對する絶對唯一の方途である。

此の故に日本は支那に對し、敢て親善を強要する。支那が危險に瀕すれば瀕するほど日本は之れを強行する。今回の支那事變はそれである。即ち支那が自國の分割誘導であるとも識らず極東人の極東保全を破壊する行爲とも覺らず、東洋平和を擾亂するものとも知らず、歐洲諸國の權勢を誘入しつゝ、抗日に専念し、武備を整へ軍隊を配置し、以て我れに挑戦するほどに、支那の實情が危險に瀕したから、日本はこの現實に處して之れを應撃してゐる。日本は決して支那民衆を支那大陸から驅逐せんとしてゐるのではない。日本は支那民衆を愛してゐる。極東人の極東保全のため、東洋の平和維持のため、日本は支那を愛し支那民衆を愛する。日本は支那及び支那民衆と戦つてゐるのではない。今回の支那事變に於ける日本の行動は、歐洲諸國の勢力を支那に誘導して、支那を彼等の權益下、勢力下、支配下たらしめんとしつゝあるところの、危險なる支那軍閥の妄動を擊破し、以て此の際極東人の極東保全のため、東洋の平和維持のため、支那の完全なる統制と日支兩國々交の密接を求めんとしてゐる。即ち日本は極東人の極東正義に立脚して、現實支那の實情事態



に對し、已むを得ず實力を行使して支那に對日親善を強要してゐるのである。此の故に我が國は戰宣を布告しない。極東君主國の名譽に於て、極東人の極東保全、東洋平和の將來のため、日本は敢て戰宣布告を爲さないのである。

### 三

日本は極東の正義に立脚し、且つ常に大仁を以て臨んでゐる。然るに支那は日本のこの眞意を覺らず、宛も歐洲諸國の一員でもあるかの如く、極東に於ける日本の勢力を排斥せんとして、事毎に反抗的態度を執り、歐洲諸國はそれに乗じて自國の利益を増進せんとする。従つて國際場裡の極東は甚だ複雑を極めて來たのである。それにも係らず日本の勢力は進捗して行く。そこで歐洲諸國は支那を誘ひ支那は歐洲諸國を引き、共に極東に於ける日本の行動を侵略と稱する。けれども之れを極東の大局より見れば、支那の行動は全極東を歐洲諸國の權勢下に置かんとし、日本の行動は極東人の極東保全にあるのである。日本の行動が侵略ならば、歐洲諸國の極東に於ける權力の存在は何であるか。歐洲諸國は何處を何う進出して極東の問題に容喙するやうになつたのであるか。若しも日本の實力がな

かつたなら、全極東は歐洲諸國の爲めに、恐らく寸裂されてゐたであらう。即ち極東は日本の實力によつて、極東人の名の下に存在することを得るのである。

極東に於ける日本の態度はかくの如く正義であり、かくの如く眞劍である。ところが日本の態度が正義であり眞劍であるだけ、日本勢力の進捗に對する歐洲諸國の壓迫は重加する。勿論必然のことであつて、其の實情は過去の情勢が之れを示してゐる。即ち支那及び諸國が日本の行動を稱して軍國主義と爲し、或ひは日本の外交を好評して雅量を讚する時、其の都度日本國內に於ては、或ひは外交の軟弱が痛論され、或ひは國防強化が高唱されたのである。蓋し識るや識らずや、こゝに日本の偉大性があるのである。それは他でもない。民族本然性の力である。日本國政府及び日本國民は、日本の民族的史前事實への自覺に、一砥の精進を要する。日本の成長と其の政策に對し、更に一層の確信と光輝をあらしむるために。

支那大陸に野心を集中せる歐洲諸國の考へはかうである。新興日本の存在のため、其の地理的關係上、彼等は常に何うしても相當のハンデキャップを持つて支那大陸に臨まねば



ならない。これは彼等にとつて大なる不利である。此の不利を除くには日本に對し何等のハンデキャップも與へずに、同様の立場より支那大陸に臨ましむべき方法を講ぜねばならぬ。而して其の最も適切なる方法は、日本の國防力を限定すること、日本をして支那に要求せる特權を撤回せしむること、日本に對し機會均等主義のもとに歐洲諸國と同様の立場を協約せしむることである。之れが即ち彼等の考へである。従つて過去數十年來の間に於ける極東關係の諸約定には、總べてこの意圖が政略的に織込まれてゐる。而して彼等は之れを世界平和への公平なる處置と云ふ。然らばかくの如くして極東に於ける日本勢力の進出を掣肘したる、その所謂世界平和への公平なる處置に於ける結果の、極東人の極東は何うなるのであるか。

彼の九個國極東條約は一九二二年二月六日、支那に安固なる政府を完成せしむるため、支那を除く各締約國間に作られたところの約定である。而して其の骨子は第一條であつて次ぎの四項目に盡されてゐる。

一、支那の主權、獨立及び領土的行政的保全を尊重すべし。

二、支那に對し有力且つ安固なる政府の樹立及び維持のため、最も完全且つ障碍なき機會を與ふべし。

三、支那の全領土に亘り、各國民の商工業上の機會均等主義を有効に確立し、且つ維持するために努力すべし。

四、友好國の臣民若くは市民の權利を減殺すべき特殊權利、若くは特典を獲得するがため、支那に於ける政情を利用せず、また右友好國の安寧を害する行爲を支持せざるべし。

之によつて今日の支那を見れば、彼等のその所謂世界平和への公平なる處置に於ける、極東の實狀が判明するのである。即ち彼の蔣介石政權が此の約定の所謂有力且つ安固なる支那の政府ならば、それはトーチカの排日抗日侮日の政府である。かゝる政府を樹立して極東正義の日本勢力を掣肘排撃せしめ、以て全支那を機會均等主義による、彼等諸國の安全なる、自由涉獵の領域たらしめんとせるものは何國であるか。トーチカの排日の蔣介石政府を作製して其の政情を利用し、極東人の極東たるべき極東支那を變革せしめ、以て支



那の主權、獨立及び領土的行政的保全をば、彼等諸國の利益に於て尊重せんとする頭領は何國であるか。中支南支及び奥支の權勢擁護若しくは利益の獲得に熱中して蔣介石政府を援護し、以て極東の安寧を害する行爲を支持せるものは何國であるか。

支那が排日教育を実施して以來實に二十年である。其の間蔣介石は中華民國々民政府の名に於て、トーチカの排日抗日毎日の政治を行つて來た。而して其の國防的內治的には蘇聯を背後に置き、經濟的外交的方面に於ては英吉利を背景とした。蘇聯は其の對日の爲めに支那の抗日政治を必要とする。英吉利は支那大陸に進出する日本の勢力を掣肘排撃する爲めに、支那及び蘇聯の抗日態度の永續を希望する。然るに此の英吉利の希望は、佛蘭西もまた希望するところである。其の佛蘭西は對獨逸關係に於て蘇聯と結んでゐる。併し英吉利は直接蘇聯に接近することは好まない。そこで英吉利は支那に對しては直接、蘇聯に對しては佛蘭西との關係に於て利用する。即ち英吉利が佛蘭西をコンピとして和蘭及び白耳義を追隨せしめ、以て支那及び蘇聯を利用してゐる。それであるから今回の支那事變に於て見る如く、支那の長期抗日の背後には、英吉利と蘇聯と佛蘭西とがあるのである。即

ち硝子越しの花を見る如く、實にそれが英吉利流なる現實利用の便宜主義利益主義の政策なのである。

## 四

支那の長期抗日の背後には、かくの如く英吉利、佛蘭西及び蘇聯と云ふブロックがある。而して其の内部關係は、對獨逸關係に於て蘇聯と佛蘭西とは、一九三五年に露佛相互援助條約と云ふ軍事同盟を結び、英吉利と佛蘭西とは、條約の形式こそ備へないにしても、事實上の同盟關係にある。従つて此の國家ブロックは、印度並にアフガニスタン及び西藏等に對する赤化工作を緩和し、地中海の伊太利勢力及びナチス獨逸を牽制する形に於て存在する。

ところが此の蘇聯の極東に對する破壊作業は、英吉利と其の性質を異にし、國防的內治的に進出してゐる。支那事變に於ける其の關係も、蘇聯は內治的に共產主義を扶植して共產黨の勢力を増進し、國防的には赤軍の正規兵を派遣して戦線を指導し、今日の情勢は正に聯蘇容共陣の觀をさへ呈しつゝあるのである。英吉利の極東關係は、日本の正義強行に



於ける日支兩國親善の徹底により解決すべくも見られ得るが、蘇聯の極東關係はそれでも尙ほ且つ残るものである。即ち露西亞はシベリヤを侵略して之れを併せ、日本勢力の北方に隣接して蘇聯を爲し、専ら國防力を増大して軍備を堅め、共產主義を以て世界赤化に邁進せる存在である。蘇聯のかくの如き存在は、獨り極東の保全に對してのみならず、正に世界の毒藥である。それにも係らず之れと結び之れを利用せる國家のあることは、甚だ理解し能はざるところと云はねばならない。

蘇聯政府の國際的辯明によれば、共產インターナショナルを以て、政府と無關係なる別個のものであると稱し、其の諸國內に於て執るところの行動に對しては、各國政府に於て勝手に防壁せられたく、蘇聯政府は之に對して毫も異存なきものなることを明答する。而して其の毎年の大會に於ける聲明によれば、明確に東方に於ては日本を敵國と爲し、西方に於ては獨逸を敵國としてゐるのである。獨逸は之が爲めに一度は顛覆せられ、其の混亂當時には伯林に共產インターナショナルの支部が出来、以て歐洲赤化の本部たらしめんとすられた。茲に於てナチス獨逸のヒトラー總統は斷乎として之れを解散せしめ大彈壓を

下したのである。爾來獨逸は蘇聯を仇敵視し、共產主義排撃に専念してゐる。蓋し獨逸の蘇聯に對する最近の關係は、其の建前に於て甚だ日本と酷似するものがある。そこで兩國は共產インターナショナルに對し一九三六年十一月二十五日を以て、向ふ五個年間の日獨防共協定なるものを結んだのである。

但しそのころ伊太利との間にも既に相當の諒解が遂げられてゐたものと考えられる。それは同年十月チアノ伊太利外相の獨逸訪問のとき、ベルヒテスガルデンに於けるヒトラー總統との會談に於て、スペイン問題に關しフランコ政權支持を協議すると共に、ボルシェヴィズムが歐洲の社會組織を脅威する深刻なる危険に對し、獨逸及び伊太利の協力によつて、歐洲の遺産を防衛する確固たる決意を世界に發表せし、同月二十五日のチアノ外相の聲明によつて知ることが出来る。而して伊太利の正式に参加したのは一九三七年十一月六日であつた。かくて茲に日本と獨逸と伊太利との三國防共協定が成立したのである。

此の協定は其の全文の公表によつて世界に明かにされた通り、共產インターナショナルの破壊工作に對する共同防衛を内容とするに止まり、何等の特定國をも目標としてゐるも



のではない。たゞ共產インターナショナルが各國の國內關係に對して行ひつゝある干涉を見逃すことは、國內の安寧及び社會の福祉を危殆ならしむるのみならず、更に世界全體を脅かすものなることを確信して、此の共產主義の破壊工作に對する防衛の共同を本旨とし、且つ此の本旨に同感ある第三國の協定參加を勧誘するものである。即ちたゞそれだけに過ぎぬのである。けれども此の防共協定なるものは、共產主義を包有し之れと結び之れを利用せる國家ブロックの政策に對して、自ら警戒すべき意志の互有によつて醸成されたものであるから、其處に共產主義、人民戦線主義、自由主義なる國家ブロックに對立して、之れに反對なる態度の國家の既存は、勿論のことであらねばならない。従つてそれが其のまゝ現實の國際情勢なのである。即ち獨逸はスペイン問題に於て、蘇聯と行動を共にせる佛蘭西及び英吉利と對立し、埃太利問題に於てもチエツコ・スロバキヤ問題に於ても蘇聯と佛蘭西と英吉利に對立してゐる。伊太利はエチオピア問題に於て英吉利及び佛蘭西に對立し、地中海問題に於て英吉利と蘇聯及び佛蘭西に對立してゐる。而して日本は支那事變に於て、蘇聯と英吉利及び佛蘭西に對立してゐる。

支那事變の世界性と此の情勢。之れは全體どう云ふわけであるか。併し現實は常に必然のものである。日本は其の必然を知り、其の必然の自覺のもとに、事變發展の最大性を達観して、極東に於ける正義實行の堅實を期すべきである。

##### 五

支那事變の原因及び其の長期抗日戦線の展開。之れを歴史的に見れば、そこに一目瞭然たるものがある。即ち支那側は蘇聯、英吉利及び佛蘭西の其の野心ある支援によつて、抗日戦線の準備全く成り、日本側は未だ其の準備の成らざるに先立ち、支那側よりの挑戦を受けたものである。また日本が由來彼等の眼中に置かれてゐたものは、専らその國防力にあつて外交力ではなかつた。彼等は常に日本の外交を退嬰的ならしめ、以て日本を軍國主義侵略主義の國家であると高唱し、かくて日本の進行を國際的に掣肘排撃するのが彼等の筆法であつた。今次の支那事變に於ても、彼等は此の筆法により國際聯盟を利用せんとしたのであるが、今回は防共協定國の存在の爲めに、其の筆法は破れたのである。

防共協定の成立はあらゆる意味に於て、蘇聯と英吉利及び佛蘭西の、其の極東に對する



行動力を半減せしむると云ふ一大打撃を彼等に與へてゐる。支那事變に於ける蘇聯の對日態度の如何によつては、防共協定の強化性も充分に考へられ得る。而して日本の受くるこの効果は、また同様に獨逸及び伊太利の等しく受くるところの効果であらねばならない。之れが即ち支那事變の世界性と其の發展性なのである。

蓋し人類の發達に於ける其の生存様式は、民族主義、歸一主義、歸一中心主義の體系を辿るものである。それが人類生存の安全、即ち平和希望に於ける自然である。之に對する共產主義、人民戰線主義、自由主義は其の本然的體系を失へるもの、生存様式であつて、常に平和の擾亂若しくは破壊の作用を爲しつゝ存在した。此の故に人類の生存様式に於ける世界史には、幾多の擾亂と變動と興亡とがある。かくして常に現實を繼續しつゝ年代を経過し、世界は恰も妄動の自然の如き觀を呈するに至つた。即ち現實利用の便宜主義利益主義の世界となつたのである。併し現實利用の便宜主義利益主義は、決して人類生存の安全即ち平和を來すものではない。それは寧ろ平和を破壊するものである。従つて此の禍ひが世界に漲つたとき、本然的體系による生存安全の平和希望が必らず甦える。それは利益

の公平なる分配とか、持てる國と持たざる國との關係とかではなく、民族原理である。經濟原理の演繹ではなく、平和原理への歸納である。

此の覺醒に於ける生存體系は、現在のそれが本系的であるにしてもないにしても、其の生存體系の安全保持のため、共產主義、人民戰線主義、自由主義を排斥し、之れを世界に存在せしめざるべき態勢を以て嚴存する。本然性がかくの如く甦えるとき、其の覺醒せる活眼は必らず、世界の到るところに人類生存の不安と不幸の存在することを發見する。即ち現實の此の國際的領域が、皆これ現實利用の便宜主義利益主義による、不正なる涉獵的奪略の結果に外ならないことを見るのである。而してまた現實利用の便宜主義利益主義によつて國際的に規約を作り、或ひは軍備を制限し、或ひは現状維持の平和の製造されつゝあることを發見する。併しながら最早世界の平和は、かゝる不正の強要によつて構成さるべきものではない。寧ろ不正なる此の國際的領域が、本然的體系の平和希望のもとに變革さるべきである。然るに共產主義、人民戰線主義、自由主義の諸國は、飽くまで之を壓倒せんとして、現實利用の便宜主義利益主義による最後の對策を強行し、かくて世界の情勢



は、人類の民族的本然性の覺醒に於ける、一大轉換期の動きを示して來たのであるが、此の世界の轉換變革に於て、歐亞の三重點を爲すべきものが、實に今回の防共協定國たる伊太利と、獨逸と、而して日本なのである。

人類の民族原理による統合は、民族の血統に於ける同一性の濃度に正比例する。此の原理による國際歐亞の將來は、東亞の本然的歸一が日本を中心として實現され、北歐は獨逸を中心とする生存様式の體系に轉換し、南歐は伊太利によつて本然的生存體系に變革され、佛蘭西は亡び、英吉利は歐亞に居地を失つて、其の奪へる總べてを棄てつゝ、加奈陀に退却する。かくて人類生存の安全即ち歐亞の其の平和は亞弗利加、歐露、中亞に於ける、伊太利と獨逸と日本との、最も原理的なる理解によつて護らるゝであらう。併しながら之れは不正なる野心では決して遂げられない。何となれば之れは個人的にも國家的にも國際的にも、現實利用の便宜主義利益主義なる行動の否認と、共產主義、人民戰線主義、自由主義の排斥遂行によつてのみ構成さるべき、正義の殿堂であるからである。即ち總べてが民族原理の支配による、人類本然の平和實現であつて、實に自然と人智との一致に於ける、莊

嚴なる生存體系の建設なのである。而して今次の支那事變もまた實に、かゝる正義の強行に外ならぬのである。

英吉利が亞細亞に於て奪略せる、其の總べてを放棄しつゝ、西へ西へと退却する姿は、全亞細亞民族の等しく凱歌を以て見るところであらう。是れ實に民族原理の聲である。即ち亞細亞の平和は亞細亞民族の本然的平和であらねばならぬ。英吉利の便宜利益によつて作製さるべきものではない。従つて亞細亞民族の覺醒蹶起と共に、英吉利及び佛蘭西の勢力は退却せざるを得ぬ。之れに對して覺醒伊太利の嚴存は正に彼等の、全東方政策を切斷すべき名刀である。また露西亞は獨逸に統合さるべきものである。元來スラブ民族はルマン及びフィン種族を混血せるゲルマン民族の一種であつて、歐露にこそ居地を有すれ、ウル以東を領有すべき理由を持たぬ。従つて極東人の極東保全に於ける正義の發動と共に、露西亞はウル以西に還元しつゝ、覺醒獨逸に統合される。而してシベリヤはシビリ即ち鮮卑の昔に返へり、其の迷へる古住民族もまたこゝに始めて、本然的なる平和體系に歸一することを得るのである。



然るに蘇聯は此のシベリヤに蟠居して共產主義を撤き、世界赤化の軍備を構へ、日本を敵國としてトーチカを築き、支那赤化の工作を着々進めて其の情勢を共通にし、其の態勢の一致化と共に支那の國防軍備をも、日本を敵國とする其の對日トーチカの延長たらしめたのである。此の故に今次の支那事變に於ても、蘇聯が當然その背後に内治的國防的の實力として存在する。即ち支那の其の抗日戦線の内治的主力は共産黨であり、國防軍事は赤軍が指導してゐる。かくの如く見て來れば、支那の其の長期對日抗戰の因を爲せるものは實に此の蘇聯であることが明白となる。即ち支那事變の現實は、一面に聯蘇容共の内治的國防的なる支那人と、一面に英佛聯交の外交的經濟的なる支那人との、合流混成による怪物支那人の一團が南方よりの軍需補給を計りつゝ、支那を欺き民衆を驅つて繼續せるところの北方よりの指導實力の活動に於ける、對日長期抗戰の全線に外ならないのである。

かくの如き蘇聯の行動は、其の未だこゝに至らざる以前に於て、既に擊破し置くべき性質のものであつた。然るにそのことなかりしたため、蘇聯の赤化工作は中南支に及び、而して長期抗日の全戦線を指導し、こゝに彼の露佛相互援助條約が、佛領印度支那を中心と

して佛支間の關係にまで延長されんとし、かくて其の後方に於ては、外蒙と連絡して新疆省に赤軍の師團を設置し、以て之れを蘇聯邦たらしめつゝあるのみならず、此の機に乗じて支那にソヴェエツト政權を樹立せんとさへしてゐるのである。

日本の支那に對する國交上の重要なことは、日支親善の徹底と、經濟提携にある。即ち専ら外交的經濟的である。日本の蘇聯に對するそれは、蘇聯存立の性質より見て、共產主義排斥と軍事的防備にある。即ち内治的國防的である。而して蘇聯は支那の對日長期抗戰の因を爲せるのみならず、不禮にも我が國に對し、幾多の重要問題を未解決のまま、放置して、専ら國境に軍備を堅めてゐる。従つて蘇聯と日本との關係は即發即戰の情勢にあると云つてよい。然るにも拘らず外交的經濟的たるべき對支國交關係が、却つて今次の支那事變に於ける交戰状態を現實し、即發即戰の情勢なる蘇聯關係は、尙ほ且つ緊張のまま、持續されつゝある。之れは全體どう云ふわけであるか。

蓋し支那事變は決して簡短でない。即ちかくの如き重層せる複雑性と、かくの如き發展性の前に展開してゐるのである。



政治は民族を作るものではない。政治は民族本能の醗酵に基づく所産である。従つて政治によつて強制されたる生存様式の體系は、決して平和を持続しない。必らず本然性の覺醒によつて破壊する。即ち共産主義、人民戦線主義、自由主義、及び現實利用の便宜主義利益主義が、決して世界を平和にしない所以である。

民族の統合作用に於ける本然的生存様式の構成は、一が二を誘ひ、二が三を結び、三に四が投合する政治である。即ち民族原理に立脚して民族の本能を抱擁するのである。而して之れは諸民族の其の本然性に於ける本系的中心民族に依る場合ほど堅實性が増加する。従つて民族發展の進路には自ら動向がある。即ち民族原理はかくの如く、國家發展の指針を爲すものである。自覺ある意識生活を爲せる體系民族の勢力進涉は、外圍の重壓の爲めに爆出する火山作用の如きものではない。

大凡世界に國を爲す國と云ふ國は、其の何れの國たるを問はず、其の國の歴史即ち國史を見るに、何れも皆その信すべき最も悠久深遠なる民族事實の最初を以て開國紀元とし、

之れを國史の初頁にしてゐる。けれども今日に於ける民族研究の結果より之れを見れば、其の國史は民族事實の最後の頁から初まつてゐる。即ち其の國史は、甚だ長き年代を有する民族事實の、極めて新らしき、最も短き最後の部分の國家發展史に過ぎない。而して是等の國々が過去の重大性に氣付かず、否な却つて之れを知るは國家に害ありとすら思惟して、専ら其の最も短き最後の部分の國家史にのみ立脚し、以て各々自國の勢力及び權益の擁護進涉を計りつゝ、國家の發展に熱中してゐるのが、現實の國際世界であるから、勢ひ現實利用の便宜主義利益主義となり易い。従つて自由主義、人民戦線主義、共産主義などもまた起つて來るのである。

併しながら民族原理に立脚するといふことは、かくの如き發展策を云ふのではない。寧ろ之れとは反對に、其の國の勢力進涉が、史前即ち國史以前の民族事實を辿つて行はるゝことである。即ち開國前祖の來り給ひし跡を、子孫民族が尋ね求めて進むことが國家勢力進涉なのである。それであるから民族主義、歸一主義、歸一中心主義の發展によつて、共産主義、人民戦線主義、自由主義が退散して行く。之れが即ち國祖の教へであり、また開



國の道なのである。

民族事實はまた内治の指針である。即ち一國の存在及び品性は専ら國史に基づく。國民思想の堅否は國史信念の堅否である。従つて國史教育は國民思想に重大なる關係を有する。即ち國史教育の缺陷は國民思想に缺陷を生ぜしめ、國史教育の動搖は國民思想を動搖せしむるものである。此の故に國家は常に國史教育に意を注ぎ、祖國の存立及び品性を明らかにして、國民思想の涵養に勤めねばならない。即ち常に民族事實に立脚し、立脚せしむることである。

國史は悠久の過去より悠久の將來に續く民族事實の尺度中に於ける、數寸若しくは數尺に外ならぬ。故に過去の尺度は現在の尺度であり、また將來に對する尺度でもある。然るに之れをたゞ現在の數寸若しくは數尺のみに立脚して、民族事實の全部を縮中するならば此の數寸若しくは數尺が如何に美麗であつても、それは目なき尺度であつて、將來を計るの用を爲さない。かゝる國家は現實蟄居の國家であつて、民族の國家的對外發展には何等の正當なる理由を有せず、一步を出づるも侵略の名を負はねばならない。従つてかくの如

き國家は、爆發しなければ化石するであらう。甚だ危険なる愚事である。

民族事實は内治であり、國防であり、外交である。總べてが民族事實である。而して民族事實に立脚せる内治國防外交に對する一元的發光の自覺を得るために、悠久なる國史以前の民族事實を追求するのであるが、實にそれが其のまゝ、國家の勢力を進渉すべき動向經路を知ることである。即ち國家の存立及び其の勢力進捗の指針は、國史以前に於ける民族事實にある。従つて民族事實の追求は、内治の指針であり、國防の指針であり、外交の指針である。此の故に民族事實の追求は、内治國防外交に對する一元的發光の力強き自覺を與へるのである。人類の世界は民族事實である。而してそれは原理による分散と統合と及び其の關係に外ならない。

人類の民族原理による分散は、血統に於ける同一性の濃度に逆比例する。人類は此の原理により、幾多の原始的民族を爲しつゝ、世界の各所に分散した。複雑を避くるために最も簡短なる比喩によつて説明すると、例へばパミールから無數の河川が次ぎ々ゝに流れ、最後に本流が其の無數の河川を幾多の支流と爲しつゝ、東海に流入した。而して我が國の歴史



的民族事實は、此の本流なのである。即ち日本紀に慶を積み暉を重ね多くの年と所を歴たと述べられてある如く、正に我が日本國は、悠久にして且つ偉大なる國史以前の過去を有する。従つて此の過去を現實に辿つて行くことが、日本の國勢進捗であらねばならない。而してそれは分流したる幾多の支流が再び本流に統合することに外ならない。決して不正ではない。當然である。原理によつて分散したるものが、また原理によつて統合することなのである。即ち日本を中心としての、東亞諸民族の本然的なる平和體系が、建設される所以である。

我が國は人類本然の民族性に於ける、生存體系の本系である。それであるから歸一中心主義の過去の通りに、歸一中心主義の現在を爲して、歸一中心主義により將來への國家發展が行はるゝ。之れが即ち我が國體である。決して製造されたるものではない。即ち自然である。従つて我が國は悠久にして且つ偉大なる過去を有し、また偉大にして且つ悠久なる將來を有する。故に此の過去を知り此の將來を知る者は、常に其の確信による力強き現實自覺がある。日本國民たるものは總べて、偉大なる思想の所有者でなければならぬ。

偉大なる歴史的民族事實の、偉大なる成長であらねばならぬからである。

我が國の歴史的民族事實は、かくの如く自然である。而して其の進出の動向経路が西方であることも。過去の東漸を逆押しゆく自然の西進に外ならない。併しながらそれは決して大河の決するが如き形状によつて、全面的に驀地するのではなく、最も近き過去より遠き過去への前進である。また平和體系の建設に對する民族歸一の統合も、決して端的に速行さるべきものではなく、漸的に分營的まとまりを爲しつゝ行はれる。日韓の併合も、滿洲國の建國も、皆この自然に外ならない。即ち朝鮮はもと日本國が其の祖を爲した國なるが故に、滿洲國は上代に於ける民族的分流の古地なるが故にである。かくて我が國の勢力進捗は、歴史的民族事實の過去を辿つて支那大陸へと前進する。此の最も民族的なる我が國の勢力進捗の動向経路は、北緯四十度を北方に迂廻して南方に斜行する一線を以て表現することが出来る。而して此の一線こそは、實に是れ東亞諸民族の本然的なる平和體系が建設さるべき、民族原理の重點を繼ぐ一線であつて、また正に我が歴史的民族事實の、最も近き過去より遠き過去への前進たる一線に外ならないのである。



かくの如く民族事實の自然に立脚して、今次の支那事變を見れば、慥かに歴史的民族事實の過去を辿れる、我が國必然の現實なることを知る。即ち所謂支那歴史に於ける上古史の地は、所謂漢民族の歴史の地では決してない。正しく我が國の勢力が進捗すべき民族事實の古地である。是れ實に日本紀の指示するところである。而して今や皇軍の威力、現に其の殆んど全地に及ぶ。之れを四千年の過去に想合して、正に卷土重來の現實であり、また失地回復の現實である。

現實は常に必然のものである。日本は此の必然を知り、此の必然の自覺のもとに支那事變の世界性と、其の發展の最大性及び其の重層性を達觀して、支那事變に對すべきである。從來の如き國際正義は、便宜主義利益主義者が、東亞侵略のために作製したる國際正義であつて、極東正義の標準と爲すべきものではない。況んや世界は一大轉換期に入つてゐる。極實の正義は日本が實證して行く外に途はない。日本はたゞ正に此の現實の必然なる民族事實の自覺に力歩して、之に臨むべきである。今次の支那事變は決して單純でない。我が大日本帝國にとり重大なる意義を有するものである。國民も政府も茲に認識を深めて、更

に一層の緊張を必要とする。

本書を読まれたる方は左の書をも併讀されんことを切望する。

統合智に立脚したる國防思想觀 (二〇セン)

日高瓊々彦述

東亞建設の指導原理 (三〇セン)

東京市淀橋區西大久保三ノ二〇

發行所

文教振興會



391  
623

昭和十四年二月二十一日印刷  
昭和十四年二月二十六日發行

(非賣品)

東京市澁橋區西大久保三ノ二〇

著者 日 高 瓊 々 彦

東京市芝區琴平町二六

發行者 田 中 近 藏

東京市芝區西久保巴町三〇

印刷所 近 藤 順 弘 社

東京市芝區琴平町二六專榮ビル

發行所 維 新 社

電話芝(43)二八一七番



14.2 24